

奥平謙輔と北一輝

(平成十五年十一月十六日講演)

北一輝は大変難しい人物で、私どもがこれまで知っていることだけでは納得できないような面をもつております。

そこで今日は、佐渡の明治維新の前後の人、奥平謙輔のような人物にスポットを当てて、北一輝に接近してみようと思います。

奥平謙輔は長州萩の生まれで、佐渡へ最初の長州藩の司令官（参謀）として乗込んできました。慶応三年十月、徳川慶喜は大政奉還しましたが、佐渡は航海がなかつたため翌年まで知らず、二月になつて初めてその話を聞くことになります。慶喜が何故大政奉還したか、そのあとの戊辰戦争をやつたところから考えると、奉還することによつて将軍が議会の議長に就いて議会運営する、というような格好で行けると思つていたわけです。幕閣には、早く奉還することが幕府を続けていく上では都合がよいとする意見が強くありました。しかしその後、徳川家を滅ぼし抹殺するということが決まり、討幕の勅命が出ると、それでは話が違うではないかということから戊辰戦争が起こされます。

ですからこの戦争については、起こすのが当然だという意見と、天皇に刃向かうとは何事だという意見の二つがあるわけです。北一輝などは前者で、約束を守らない天皇の方が

まずいのだ、と言つてのける。

今日から見ると、時代錯誤のように思われますけれども、いつの時代でもそうですが、人と人との間、或は幕府と朝廷との間に交わされた暗黙の約束（了解）が破られますと、約束を破るとは何事だということが議論の先に立ち、もう世界史の流れ等とは関係なくなるんです。これは日本人のクセですし、他の国も似たり寄つたりです。私どもは明治維新について習いましたが、維新政府の決定に幕府が叛こうとしたから討たれるのは当然だと言うのは、明治政府の作った教科書のせいであります。

さて、奥平謙輔の周辺のことから少しづつお話して行きたいと思います。この頃の話になるといろいろな材料がありますから、それを使って、自分たちはどう考えるか、或は佐渡の人間はどう考えたかというようなことが研究されるようになります。

皆さんご存知のように、明治に自由民権運動が起きたということが教科書に出ております。どうかすると自由を求めた人たちが集まつた運動であるというような顔をしておりますが、この運動が一番盛んだつたのはどこかご存知でしょうか？ 贠けた会津藩であり、抹殺すべきだと言つたのは長州・薩摩藩です。では何故、負けた側からそういう意見が出

てきたのか？それは錦の御旗を押し立て、国民の声を無視して維新政府の改革を進めようとする、勝った長州・薩摩藩に対する、負けた側の主張であります。

私どもは小学校の頃から、自由民権運動はいいものだ、と聞かされ、先生方もそう習つたので、民権運動に先入観を持ちました。これがまあ誤りのもと、戦後憲法で「民主主義はいいものだ」というのと同じであります。紛れもなくあれはアメリカが押し付けたものであります。若い人は、民主主義は世界で一番優れた主義なのだと考える、長年のクセがついております。いつの時代も似ています。

そういうことで、その辺のところを少しづつ考えてまいりたいと思います。

奥平謙輔は天保十二年（一八四一）の生まれで、維新の時は二十八歳くらい。随分若いころ、萩の藩校明倫館で学び、抜きん出ていたようであります。戊辰戦争が始まつた頃、長州の干城隊に入つて討幕活動をします。これはまた血の氣の多い連中が集まつた隊で、とにかく維新政府に反対する者を徹底的にやつつけよう、それが愛国心だ、というような手合の集まりでした。彼等はそれを「正義感」という風に、また、ある事を決するべく、何かをやってのける事を「果断の精神」という風に叫びます。奥平はそれを代表するような

人物でした。



奥平謙輔
『佐渡の歴史』郷土出版社

の住職を集めました。

これが奥平が佐渡中の人民を驚かせた最初の出来事です。

そこでどんなことを申し渡したか——（要旨）

「自分は佐渡に赴任してまだ日も浅い（十日しか経っていない）。この国（佐渡）は周囲が五十三里、戸数が一万八千八百戸、人口八万一千人の小さな国である。ところがこの国にはお寺が五百三十九もある。これを戸数で割れば、三十五軒で一つのお寺が建てられていることになる。これは無駄である。しかも、坊主の大部分は学問もなく、怠け者で、ただ信者を騙して寄付金を集めることにだけ熱意を燃やしておる」

まるで生意気盛りの中学生がものを言うような調子であります。そして、

「百姓が苦心して作つた米を気楽な気分で寄付させ、遊んでおる。ところで今度徳川幕府に代わつて明治政府になつた。そこで今までの悪習を停止することにした。自分がやるべきことは、天下の遊民である坊主を無駄ものとして退治することである」

腹を立てた中学生が先生に向かつて言う調子であります。

「しかし、一千年余にわたつて日本の文化に影響を与えた仏教であるから、全部のお寺を廃止するというのではない。十二月十日までに四百五十の寺を廃止にする。それから修驗・山伏の百五十院はすべて廃止する。そして不要になつたお寺の仏具は全て潰して貨幣にする」

こういうことを集まつた住職に命じました。

その述べ方は、非常に理論的で、よくいえば合理主義を絵に描いたようなものの考え方であります。彼の命令に対してもいろいろな意見が出ます。一部の人たちは、これは革命だ、よい時代が来ると言いました。しかし、大部分の百姓は違和感をもつて迎えました。大体佐渡の大寺の住職というのは葬儀やお供えの主宰者であり、村にはどうしても存在してもらわなくてはならない寺子屋の師匠さんもあります。だから、お寺さんというのは村の人たちには是非必要なものでした。考えてみれば、みんながお寺を必要とするからこそ、寺

は存在し、これまで村人が守つてきているわけです。奥平のように、お寺さんは無学であるとか、三十五軒に一寺では多すぎるとか、という風に決めつけられると眉をひそめることがあります。奥平のやりかたは独断的であると思うものの、なにしろ彼の後ろには鉄砲を構えたのが居りますから（新潟から草莽の「北辰隊」百数十名を同道）、これに反対の意見を申し述べることなどは難しかったであります。

よく明治維新、あるいは明治の歴史を考える場合に、維新政権と徳川政権とは支配者が代わっただけで、実際の中身はなにも変わらなかつたという風に主張する人がおります。とりわけ、維新政府を悪く言う人たちの中には、「ただ、立つ者がすりかわつただけなのだ」、と言つてのける人が居ります。私はそういう風に考えてはいけないのではないかと思つております。

それまでの幕府の役人というのは、百姓とはほとんど無関係であります。幕府の役人というとただちに武士という感じを抱きますが、大部分の役人は今の市役所か役場の職員と同じで、あまり細かいことは言いませんでした。ところがこの維新政府の役人のやろうとした事は、佐渡の百姓にとつては革命でした。今まで考えてみたこともない時代が到来し、しかも百姓の言い分など一切聞かない、命令に反するものは鉄砲で撃つというのです。来

月の十日までにお寺を整理できなければ旧幕の役人を殺してしまう、という仕掛けであります。こういう奥平のやり方に対し、佐渡の人たちはこれは恐ろしい時代がきた、しかも自分たちの言うことなど一切聞いてくれないような政府が出来た、という風に受け止めました。ですから、「民衆の意見を聞いてくれなくては困る」という気持がある。これがやがて起きてくる自由民権運動の背景にあります。なにも世界の資本主義がどうなつているとか、民主主義がどうだとか、そんなことに関係ありません。佐渡の自由民権運動は、俺たちの意見も聞けという要求を背景にして生まれた、という風にお考えいただければ宜しいかと思います。

奥平謙輔という人物は、二十八歳の若さということもあるのでしょうか、佐渡の役人が横柄に挨拶したりすると、草鞋わらじを履いたままで頭を蹴飛ばしたというくらいですから、まあ相当激しい性格の持主です。しかし、物分りが悪いかというと、そうでもない面を持ち合わせておりました。

幕末に佐渡奉行所組頭・中山修輔を中心に、幕府応援のための兵隊を募集し、佐幕同盟「迅雷隊じんらいたい」を結成しました。隊員として十六歳以上四十歳未満の男子、地役人の子供や島

民をかき集め、百五十人ほどで組織し、その旨宣言しました。この時の宣言書「祖廟斎盟記」を起草したのは当時の修教館教授円山溟北めいほくです。円山は、倒れようとする幕府を応援するのは幕府の役人としては当然で今こそ幕府のために立ち上がらなくてはならないと、いう趣旨のことを書きます。

すると奥平がやってきて、立腹、円山を呼び出し、「お前は死刑だ、幕府のために戦うなんておまえ自身が間違っている」というようなことを言つたらしい。それに対して円山が言うのには、

「私がたしかに筆を取つた。三百年の恩顧をこうむる佐渡の人が迅雷隊を結成するのは当然である。あなたの長州藩だって蛤御門で戦端を開き、天皇の軍に叛いたではないか。あなたが自分の立場がこうなつたら、あなただけて徳川氏のために頑張ろうと言うだろう」と。円山もまあいい事を言いますね。そうしたら奥平は二時間も考えてからそれを肯定しました。奥平はその後、「萩の乱」（明治九年）で前原一誠と共に殺されるわけですが、この乱は明治新政府に対する最初の反抗運動だといわれています。

また、こんなことがあります。奥平は、明治元年に一応大将としてやってきましたが、この年佐渡は不作で、百姓が税金をまけてくれと頼むと、税金をまけてやるんです。そう

したら、のちに大蔵卿などになつた井上馨（新潟県知事に任命されたが赴任する気がなく、すぐ辞退）が、絶対まけてはならん、これから新しい時代を作らなければならぬ時なのに、百姓がそう言つたからといって、まけるようなことでお前は官吏が務まるのか、というようなことで、結局クビになつてしまい、萩に帰ります。

ですから、奥平という人物は激しい側面と、西郷隆盛と同じような情理のわかるというところを持ち合わせていたのです。それが明治時代を押し進めていくのには少し不足する部分であります。

これに比べると、後に出てくる伊藤博文などは相当冷たい。あらゆる事柄について天皇を利用してでもなんでもいい、とにかく自分たちが作る政府のために国民を押さえていくことに力を注ぐ、とても冷たい人間です。それから見れば、奥平などは可愛いところがあり、こういう人物をどう読み解くかは、もう小説家の世界であります。

奥平は明治二年八月、佐渡を去ります。佐渡の人たちは、「鬼参謀」と恐れられましたが、在任は九ヶ月足らずで、島の人たちが彼から直接影響を受けたというのは、廢仏毀釈（お寺を四百潰した）と山伏・修驗院を全部潰したという二つの事だけでした。ごく大雑把ですが、全体的な位置づけとしてはこうのことになります。

こういうやり方を佐渡人は革命としてとらえた。これはもう、革新などというものではない、なにしろ今まであつたものが全部踏みつけられたのですから、ひどくこたえたわけです。

さて、佐渡はもう明治十年代の初めに自由民権運動が起きてまいります。その中から北一輝などが生まれてきます。県内でも佐渡は非常に早く運動が起きておりますので、それは何故なのか、という事を考えてみると必要があると思います。とかく私どもは、自由民権運動などと言うと、誰か偉い人がヨーロッパの書物を読み、「自由」について説いて回ったので、みんながその趣旨を理解して運動を起こしたと考えがちです。確かにそういう面もあるのですが、それだけでは、なぜ佐渡でということがしつくり来ません。佐渡の人間が維新政府の長州藩の激しい連中に支配され、グワーの音も出なかつた。しかも明治九年には、相川県が廃止され新潟県に合併されてしましました。このことも、言つてみれば、反対する、しないではなく、維新政府には、佐渡の人間の言うことを何も聞いてもらえないかつた、これが佐渡にとつての明治政府の位置付けでした。

ですから、このことに配慮しないで、北一輝はこう言つたと、特別に偉くするようなことはできても、片田舎から生まれた北一輝の言説がどうして日本人を二分するような事に

なるのか、或はのちに他の青年将校に影響を与えて二・二六事件を起こすような事になるのか。

ところが、そのところが分らないと松本清張は言います。清張は、「北一輝などあんなのは問題にならない、一体勉強したことがあるのかな」という具合に言います。これは清張の方が勉強嫌いだつたんでしょう……、多分（笑い声）。そして調子がいいだけで、清張は實際には分つていないのでないか、と私は思います。

何年か前に、松本清張に佐渡で講演をしてもらつたことがあります。佐渡へ一度も来たことがなくて『北一輝論』を書いている。大体、現地で調べないのは勉強不足です。北一輝のことを調べるなら、生まれ育つた両津へ来て、現場を見る必要があると私などは思いますが、清張は「そこへ行かなきやならんような人間に本はかけませんよ。行かなくたつてちやんと書けます。人間には頭がある」などと言う。しかし、歴史の現場に行かないで簡単に書けるというのは大変野暮な話であります。一寸申し上げておきますが、清張は偉いのでしようが、北一輝に対する議論は評論であつても、底の浅い理解にとどまつているようには思ひます。

さて、これから北一輝のことを少しお話しますが、先ず、彼が置かれていた時代はどうであつたかを申し上げておきます。

明治維新をどういう風に考えるかについては様々な考え方があります。私どもが学校で習つたのは大体、日本は、十六世紀からこのかたヨーロッパに比べて格段に遅れていた、という考え方です。今でもそういう風な考え方を持つておる人が随分おります。遅れていふということは、取りも直さず、進んでさえいればイギリスかアメリカのようになるという考え方を根底に持つております。そう考えることがいいかどうか。しかし、そう考えることは、つまるところ、一国の独立にも関わる問題だと私は思います。

例えれば、昔の本には、日本では明治維新で初めてヨーロッパと付き合うようになり、それまでは鎖国をしていた。だから百姓にしても縄文弥生の時代から土を撫でていただけでもちつとも進歩がなかつた、という風に考えておりました。泥をこねていたというのは確かにそのとおりです。普通の国でしたらいわゆるマーカンティズム（重商主義）、文化的には産業ルネッサンスと訳しております。重商主義というのは、王様がいろいろな生産活動にお金を使つて乗り出し、今で言えばたくさんの企業が生まれ、これによつて農村社会が近代へと進んで行つたが、日本ではそういうものがぜんぜん育たなかつた、という風に考え

ておりました。しかし、江戸時代後半には、各藩が産業奨励に全力で取り組んでおり、これまでの江戸時代論が時代認識の誤りであることは、先般来お話し、皆さんご承知のところです。

さて、幕末の頃、佐渡はどういう状況下にあつたかを見てみたいと思います。

一八〇〇年代の初めに、イギリスの軍艦フエートン号がオランダの海軍を追つて長崎に来航し、オランダ商館員を脅迫し、薪や水や食料を求めるに退去、それで長崎奉行が引責自殺するという事件が起きました。幕府はこれに対して、日本に上陸しようとしたら打ち扱えという法令（文政八年「異国船打払令」）を出します。佐渡では、あつちこつち二十六もの「浦（海側）番所」——見、窪田、渋手、沢崎、深浦、宿根木、鷺崎など——という番所を設け、その傍に砲台を建設し、外国船が来たら排除しようとしました。でも、そんなことで外国船を追い払えると、幕府自身も思つておりません。敵艦が陸へ上がつてくればともかく、大体、日本の大砲は弾が五十メートルくらいしか飛びません。ただし、みんな、これは世の中が凄いことになつてきたというくらいのことに受取りました。ですから、幕府のやつたことは早い話が国内向けのサービスであります。出来るだけ敵国との摩擦を避

けようとしてこの法令を出します。敵艦が近づいても、逃げていく場合は敢えて追いかけ
る必要はない、水が欲しいのなら与えてすぐ追い出せなどと言います。二里毎に番所を作
つて、逃げていく時は追いかけて行くつていっても、相手は石炭を焚いている船、こちら
は手漕ぎ船でギーコーギーコですから、追いかけていく必要はないといわれなくたつて行
けませんよ。当時の人たちは大いに沸きたつて、外国船が来たら大いにやつてやるくらい
のことばは言つたに違ひないと思います。

佐渡にも鷺崎（佐渡の北端）に一回だけ外国の軍艦が現れたことがあります。そこで海府
の漁師に水を持たせて行つてゐる。相手が逃げようとしたので、水だ、水だと言つてよう
やくのこと渡します。外国船は大いに感謝して、漁師を呼んでご馳走し、それで帰つて
いきました。一方、村では相川へ走つて外国船到来の連絡をするわけであります。船が現
れたのは朝方ですが、相川から奉行所の船が到着したのは午後五時、もう外国船はおりま
せん。その取調べ記録というのが二つ残つていて、一つは村に、一つは奉行所にあります。
村の書き物には感謝され、船に上がつてご馳走になつたと書いてありますが、奉行所の記
録にはそこが抜けている。まあ、そんな程度ですから、實際は大した事にはならない。

その当時の佐渡の人間は外国船の話はたくさん知つていて、彼等が大砲をぶつ放したりし

ないこともこれまたよく知つておりました。大体、佐渡の人間がエトロフ、クナシリに行くような時代を迎えており、彼等がオロシア（ロシア）の産物を持つてきて佐渡で売買するようになつております。敵が来たら打ち払えと言つても、もう民間レベルではみんな先刻実情を承知しております。その上、小倉村（畠野）の新井精斎などは北海道事情の講義までしておられます。こういうことでも分るよう、佐渡の人間は外国船が何のためにやつてくるのか、物を売買するために來ることを知つておるわけで、彼等が來てもそんなに驚きません。驚け！と頑張つているのは幕府の方です。明治の初め頃、沢崎（小木半島の突端）へ数人の外国人が上陸し、沢崎の人が案内して小木番所まで送り届けるということがありましたが、その外国人は帰国してから「佐渡の人間は物見高く、我々の後をみんなぞろぞろついてきた」と書いております。

幕末の頃、土屋長三郎という奉行がおりました。この奉行は外国船を迎撃つために、傭兵を集めて竹槍で訓練させました。外国船は大砲を持つてゐるが、それを恐れる必要はない、我々は大和魂で戦うと訓練をやりました。我々も戦時中似た様な文句を聞いたことがあります。

当時流行つた盆踊り歌に、

オロシア船なら 千艘来ようとままよ

土屋長三郎さん 来にやよから

佐渡奉行所の前で、お盆になればこの唄をうたつて盆踊りをやります。ですから、奉行が耳を被つてもこの唄が聞こえてくるので、苦笑いしながら聞いていたという話が伝わっております。何しろ砲台を作るために島内で千七百人もの労力を徴発しました。その理屈は、「お前等が今日無事でいられるのは、幕府のお陰なのだ、その恩返しが出来るのを有り難いと思え」というわけです。こんな風ですから、砲台作業に出ても一文たりともくれないし、幕府の恩の押し売りに対して、村人は奉行が来ないほうが有り難いという唄を歌つたのです。別段、奉行に聞けといつてはいるのでないけれども聞こえてしまうので、盆踊りを禁止しようとしたという話が残っています。

こういう風に、法律と実際が恐ろしいほど違っていたことを示す資料、例えば「農兵願書」というのがあちこちの村に残っています。一、二紹介しておきましょう。

沢根の田中村から出した願書には(要旨)、

「この度農兵について百姓が順番に調練に参加するよう申し渡されました。しかし、私どもの村は百姓稼ぎのほか若い者は人足にておりまして、それを止めて調練にでたの

では生活が成り立ちません。それゆえ、もし万が一必要だという時が来ましたら、村人はどんな命令でも従いますから、回りまわりの調練に出ることはお許しいただきたい」農兵の割当ては、石高百石につき三人と決まっておりました。沢根村の村高は千七百石なので農兵は五十一人、そのうち十九人分はお金で出せ、残りは訓練に出よ。村としては十九人のお金は絶対に出せないと、断ります。

それから、農兵に出ることについて村うちで取り決めたものが残つておりますが、原黒村(両津)の例をみると、

・農兵に出るものがあつた場合、村からお金を支払う。調練に出た日には、一日一貫文ずつ支払う。

百姓の日当稼ぎは普通一日百文ですから、十日分を一日でくれます。随分高いと思うかもしれません、それくらいお金を出さないと出るものがいなかつたということの裏返しです。

- ・他国へ兵として行かなくてはならないときは、村方の責任で断ること、もし負傷したり一命を落とした場合は、村が礼金を出すこと。
- ・村の重立の家は農兵に出なくてもよいことにしよう。

この村では、鵜飼郁次郎（のちに第一回帝国議会議員）の家がそれに当つた場合は、長次郎という者が代わりに出る事にする。鵜飼の家は大きな酒屋さんで村の人がいつも厄介になつたり、物をもらつたりするものですから、村で負担することにするわけです。

こういう取り決めをしながら、幕末の村は動いております。村の中で一番うるさく言われたのが「公平」ということです。金持ちは負担が軽いのではないかということ、今の社会も次第にそうなつてきておりますが、国が貧乏しますと、「負担の公平」ということを言い出すのが常であります。今の消費税みたいなものでしよう。昔はお金持ちはお金持ちとして応分の負担をするというのが公平だと考えました。ところが、支配者がだんだん強くなつてきますと、国民のみんなが薄く広く負担するということが公平だというようになります。今の小泉さんは金持ちは金持ちは思ひませんが、こういう考え方のようです。良し悪しはこの際ぬきにして、消費税を例にとると、お金のある者、ない者も、同じものを買えば同じように税金をかけるという発想で成り立つております。これを広く国民に負担を求めると言えばいかにも立派げに聞こえますが、要するに貧乏人に対する苛酷なやり方です。幕末にこのバランスが崩れてきて、金持ちは負担が軽すぎるという声がだんだん大きくなつてきます。具体的に見ると、一軒当たりいくらとか、一人当たりいくらとか、そう

いう負担の仕方に問題があるという声が大きくなつてきます。それに対して金持ちの側ではどう答えているかというと、「世の中で用があるたびにいろんなところでお金を出していれる、お金を持たない者が知らないようなところで大いに社会に貢献している」と主張します。負担が重い、例えば人足賃をたくさん取られるというけれども、人足賃はとるがそれはお前ら小前こまえ（小百姓、水呑百姓）に賃金を払つてているのだからそれに文句をいつてはいけない。

こういう具合に、金持ちとそうでないものとの間がぎくしやくするようになつてきております。幕末の頃、小木あたりでは盛んに小前騒動が起こり、打ち壊しなどが起きるようになつて来ました。明治になると、百姓たちは、これから村は我々が考えて動かしていくこうという風に次第になつてきます。

さて、明治維新で佐渡奉行所は潰されます。ここでは詳しくは述べませんが、潰され方は非常に激しいものでした。最後の佐渡奉行鈴木重嶺しげねが江戸へ呼ばれ、留守を預かつたのは、先ほど申しました組頭中山修輔です。中山は洋学者、緒方洪庵の弟子で、開明派の人でした。佐渡は幕府直轄領でしたから、幕末になると盛んに会津藩の藩兵がきて、佐渡を守つてやるというようなことを言います。それに対しても中山は、「局外中立」を唱え、「我々



中山修輔の肖像画

『佐渡の歴史』郷土出版社

は佐渡の八万あまりの人間を預かっており、会津藩がくれば佐渡は朝廷や長州・薩摩藩との戦争になる。佐渡の人間を戦争にあわせたくないから帰ってくれ」と交渉します。彼がを唱える「局外中立」というのは、どちらにも味方するというもので、今日私どもが言うのと正反対です。中山は佐渡ではあまり知られておりませんが、ともかく、この人のお陰で佐渡は戦場にならないで済みました。あとは長岡藩でも、新潟戦争では大変な犠牲を払つたことは皆さんご存知のとおりです。

こういう状況で明治を迎えた佐渡で、明治十六年生まれの北一輝がどういう風に明治維新と関わってくるかに話を移したいと思います。

北一輝が初めてものを書いて登場するのは明治三十六年六月のこと、「国民対皇室の歴史的觀察（所謂國体論の打破）」（以下、「歴史的觀察」）という論文です。「佐渡新聞」に二回連載されたあと、中止になりました。そして、発禁処分を食らうことになる有名な『国体論及び純正社会主義』（以下、『國体論』）はこの三年あと、明治三十九年に出ます。印刷会社は関わりを恐れて、引き受けたがらなかつたようです。

さて、この「歴史的観察」で北一輝がどういうことを言つているのか――

「万世一系の天皇を戴いて、全ての国民が心をひとつにしようという風に政府は大声で叫んでいる。そう言つていれば国民は政府に服従するというのは、全然無分別な発想である」

そして、

「日本の皇室と国民の関係は、支那、歐米の皇室と国民の関係とどこが違うでありますか、こんな事を新聞紙上に発表すればたちまちにして、それは破壊行為であると言われ、不敬罪になり、不忠だといわれるに違いない。しかし自分はこれを述べないではいられない」と、書き出します。

北一輝が攻撃しているのは、当時の「国体論」という風に言われた政府流の考え方であります。この国体論こそ日本の確固たる独立を犯し、信仰の自由を抑え、国民教育を腐敗させる根源である、という主張を展開していきます。どうしてこんなことを言い出したか、つたか、それなりのわけがあります。

これは、北一輝が佐渡中学の八田三喜校長に習つたことなのですが、藤原氏についてこう言つております。

「藤原氏は、藤原氏の血筋を引かないものは高位に就けないといって、朝廷にはびこつて天皇の権威を欲しいままにした。平氏を討った頼朝は天皇を欺いて帝国の実権を奪い取つた、と。つまり、蘇我氏もそれ以後の政権担当者たちも自分の権益を維持、拡大するため天皇を利用してきたではないか、だから政権の担当者が天皇を利用して野暮なことをすれば国民が天皇に不忠を働くのは国民として当然の権利である。」

という風に言います。もう少し、言うところを聞いてみよう。

「……民政に熱心な執権北条義時は大胆にも父子三帝を捕らえて島流しにしたではないか。」

北一輝が終生主張することは、「国民のために一生懸命努力しない天皇などは、天皇に値しない。天皇は天皇であるが故に神聖なのではなく、天皇は国民のためにいろんな努力をされるが故に国民が敬うところなのである」と。

こうした主張に伊藤博文は苦虫を喰み潰しますが、天皇の政治目的というものを北一輝はちゃんと見抜いております。だから、「天皇であっても、地位を守ることだけに執念を燃やすような天皇は島流しにされて当然である」。北一輝は、近くは順徳天皇（或は上皇）を見ているわけです。ですから、彼は『国体論』の中で、国民の幸福を目指して政治が行わ

れ、国民がそれを喜ぶのであれば、政治についていちいち天皇の認可、裁可を得る必要はない、と述べ、徳川家康のやり方を認めることになるわけです。「明治維新に際しても、幕府に対する京都側、つまり明治天皇或は新政府の処遇があまりにも冷たく酷いものである事を目にすると、北日本の国民が一斉に立上がって己の血と屍とで滅びゆく將軍を守ろうとしたではないか」と言います。そして彼は、この本の中で「乱臣賊子」（國を乱す臣と親にそむく子）という言葉を盛んに使います。「東北諸藩が徳川幕府のために戊辰戦争を戦つたのは当然のことなのだ」。だから、東北の人間はみんな乱臣賊子だ、と言い、大見得を切つて見せます。北一輝によれば、会津藩や米沢藩が將軍を守るために立ち上がった行為こそ忠誠心である、というわけです。この論文を書いたのは明治三十六年ですから、維新からまだ三十年あまりで、それは丁度私どもが昭和五十年代に第二次世界大戦を振り返っているようなものです。

明治史に対するこういう理解の仕方、これが人間としての道義であるという風に北一輝は考えるのであります。

ところで、冒頭に北一輝をくさした松本清張は『北一輝論』の中でも、北一輝は言うことに一貫性が全くない、出まかせだ、と言っています。ちょっと清張の言うところを聞い

てみましょう。

「明治維新は、ヨーロッパ人が言う人民革命ではなく、幕藩経済体制の行き詰まりの改革にすぎない。だから、新しい統治の経済がなんとか、かんとか言つても本質的には前と何も変わらない。江戸幕府が明治維新政府と名を変えただけである。国民に対する支配の仕方は全く変わつておらず、革命でもなんでもない」と考える。第二次世界大戦後のわが国についても、これと同じようなことを主張する人たちがおります。革新を唱える政党の中には、「戦前は軍閥が我々を支配していた、戦後は資本が我々を支配している、だから支配する人間が変わつただけで支配する仕組みは同じである」と。清張の場合は、ヨーロッパ、つまりフランス革命のような殺し合いをするのが人民革命であつて、明治維新のようないいものは革命でもなんでもない、という基準でものを見ておるわけです。

一方、北一輝はどう見ていくかといふと、明治政府は革命政権である、と見ております。北一輝はこういう風にして生まれた明治政権であるのに、長州や薩摩の一部の人たち、伊藤博文などが出てきて、自分たちの利益を拡張するため、やたらに国体論を振り回し、天皇の権威を第一にするという考え方を持ち、それに反対する人たちを陥れるようなことをやつており、それに耐えられない。

「今の政府は国体論を自分の政権維持に利用することによつて民衆の自由、国民の自由な活動を抑えることを正当化しているに過ぎない」。こういう風に維新政府の指導者の体質を暴いてみせる。言い換えれば、忠義の押し売りをしているのが明治政府の今日の体質なのだと叫ぶのであります。

ではどうして北一輝がこういう考え方を持つたのか、それにはいくつかの事情があります。清張はそのところが分かつていらない。清張が『北一輝論』を書いたのは昭和五十年ですから、かれこれ三十年近くになりますけれども、北一輝の『国体論』を読んでこういう風に言います。

「佐渡島は他（の地域）と思想的な交流が全くなく、そこで北が平民新聞を取つていたからといつて彼がどれだけの思想的な信念を得たでありますようか。二番目の弟（玲吉）は、一輝が佐渡中学に社会主義的傾向をみなぎらせて校長を辞職させたというけれども、そこに北の扇動家としての方が上としても、そこには多分に青年の画期的な激情性が目立つのみである。北の読書は直感力が先に立つて地道に勉強するという性質のものではなかつた。この直感力が先立つたから早稲田大学で聽講する程度で、上野図書館の本を参考書にして、二十三歳の時『国体論』にとりかかれたのだろう」（要約）

つまり、北一輝などはせいぜい上野図書館に通つて、いろいろな書物を読み、こういう議論をするようになるんだと、清張はこの書物を批判します。そうして、北一輝の文章を読めば社会主義など分らうはずがない、と断定する。清張は非常にはつきりしていて、その主張を若さのあまりの根無し草的な衝動だなどと、随分手荒に酷評をしております。

しかし、清張がそんなことを言つたところで、北一輝がこういう本を書くというのは北自身の体験がなければ言えるはずがない。そこで、私はその体験について考え、その頃の北一輝に影響を与えた人たちのことを少し述べてみようと思います。

北一輝は、明治三十年六月に佐渡中学に第一期生として入学いたします。学校は、河原田（佐和田）の光福寺というお寺の本堂を仮校舎にして開校され、翌三十一年に選抜試験により三年生になります。そしてこの年の十一月、八田三喜という校長が（のちに旧制府立三中や旧制新潟高校の校長になる人物）が赴任してきます。二十五歳ですから、随分と若いですね。彼については『八田三喜先生遺稿集』（以下、『遺稿集』）という本があります。

この八田さんはなかなか面白い人物であります。この八田が書いていることと、北一輝が不敬罪について書いていることと同文なのも面白いところであります。八田は後に「赤

の校長」、旧制新潟高校の校長になるということで新聞にでかでかと書かれるということがありました。

この当時の北一輝について、同じ一期生で、加茂（両津市）の市橋輝藏という人が証言をしており、市橋の証言を私がN H Kで直接採録したのですが、今そのテープが見当たらないんですよ。それはともかく、市橋はこんな証言をしております。

「一時間目に校長先生の修身の時間がありました。校長先生の話は進化論の話であります。」「これが北の社会進化論の基であります。「ところで、この北輝次君はすっかり虜になつたらしい。北一輝というのは号で、本人の名前は北輝次であります。二時間目も三時間目も教室を空けたままであります。お昼頃顔を赤くして帰ってきた輝次君に、どうした、どこに行つたのと訊くと、輝次君は校長室で校長先生の話を聞いてきたと興奮した面持ちで語る。その日から輝次君は人間が変つた。寝ても覚めても社会進化論者になつてしまつた」

後に北一輝は、中学時代に爆発した政治革命の野心や革命論を述べ出します。八田は佐渡高校六十周年記念に来校、記念講演をしました。ところで、明治三十二年九月（校長赴任の翌年）、北は四年生のクラスに編入されたのですが、翌三十三年三月には落第して

します。この年、北一輝の家は酒造りが失敗し、家業を止めることになります。お父さんは一輝を実業家に育てようとするのですが、本人は全然やる気がない。そして、佐渡新聞に投稿したりして、それがやがて国体論問題に発展していきます。与謝野鉄幹の雑誌「明星」などにも盛んに投稿し、採用されます。

先ほど申し上げたように、清張は、明治三十六年に書かれた論文「歴史的観察」を読まず、三十九年の「国体論」の方を初めて読んでおりますので、当然のことながら、著書には「歴史的観察」のことは触れておりません。

清張はこう書いております。

「（早稲田大学の聴講生、上野図書館に通つた話云々は略）この本（『国体論』）を見れば彼が図書館で何を読んでいたかすぐ分かる。實にさまざまの本を読んでいるが、中で最も参考にしたのが高等師範学校教授丘浅次郎の『進化論講話』、それにもう一人、竹越与三郎の『二千五百年史』であります」

清張が間違っているのは、こうした書物が出る三年前の明治三十六年に、北一輝はもう自分の基本となる考え方を論文として書いているということです。北一輝にこの考えを与えたのは八田三喜であることは間違いないところです。

八田は加賀の人で、第四高等学校（金澤）で狩野亨吉から進化論を習いました。狩野は「社会進化論」という言葉を最初に作った人で、のちに京都大学の先生になりました。

その八田が佐渡中学の修身の時間で何を喋ったかというと、

「蘇我物部氏から藤原と、久しい間の氏族の政治が七百年の武門政治となり、幕府が倒れて王政維新から立憲体制になつて来てる。其の間を通じて動いているものは何だろうか。特別の貴族に限られて居た参政権が、彼等が駆使して居た武士にまで及び、夫が今度は武士の徵税の為に活きていると思われて庶民にまで及んできたのだ。宗教にしても法相・三論・俱舍・唯識の哲学的仏教が比叡・高野の古典的宗門となり、夫が淨土・日蓮・禪の通俗的宗旨となつて来ている間にも、学究から貴族、貴族から庶民にと來ている。近頃流行の言葉で言うと、民本的傾向といえるかも知れぬが、之には語弊があるから、庶民的というのが妥当だと思う。此大勢は日本丈ではなく、凡の国や世の中の進化の趨勢であるのである。（中略）又經濟にした処が、奴隸同様だつた小作人や職工が、独立の自由人として取扱われ、夫が今度は株式分与法などで、資本家仲間に待遇され、其の上彼等自身の組合権まで法律上認められる國もある」（『遺稿集』）

八田の口からほどばしり出るその社会、その世界史的な発展と展開の話を聞いて、民主

主義とか人権とかを口にすると忽ち国体に叛くと攻撃される世の中で、この新任校長は全く予期せぬ発言を繰り返し、北一輝は人民とか民主主義に基本的な理解を持つ校長の講義に舞い上がり、すっかりのめりこんでしました。

校長はお終いにこういう講義をします。

「庶民的だとか民本的とかいうと、直ちに我国体がと騒ぎたがる人がある。考えて見るのがよい。我國体には何處に庶民を蔑視する歴史があつたか。よしあつたにしても、そんな時代は進化の過程引繰り返してしまつてゐる。庶民を蔑視するような天皇は流されるではないか。もうそういうことがあつたとしても進化の過程でひつくり返してしまつておる。特權的な階級が次第に進化していつて大化の革新、幕府創設、明治維新から憲法發布に発達して、ここで一度新たな庶民的制度となってきた。それが歴史の流れというものだ。庶民各々そのところを得、各々その志を遂げて、遂に立派な皇室中心の庶民的社會だ。君臣同祖同在の國家が活きて來るのである」（『遺稿集』）

八田の講義によれば、「政府は本来国民のために存在すべきものであつた。国家は社会といふ言葉で置き換えるがよい」。こういう風に修身の時間に講義し、それが北の心を奪うことになるわけです。

橋川文三（評論家、大正十一～昭和五十八）は次のように記しております。

「北の国体論の骨髄は佐渡において始めて形成されたもので、何かある古い知的伝統を母体として生まれ、それがかえつて最もユニークな新鮮さを帶びて日露戦争後の思想界に登場したという印象を持つ」

さらに橋川は、「北一輝の研究のためには、当時の佐渡における学問や思想の伝統、政治的論理的な気流としてそれを一層追求する必要がある」と、指摘する。これは先ほどの清張とは全く違う。清張は、「所詮、年少の社会主義カブレに過ぎない」といささか悪口を言つております。そして「北自身は意識の上で社会主義者氣取りであるらしく自身でしきりに社会主義者という言葉を使う。しかし、幸徳秋水の学問的主張と全くちがう。ちよつと稚氣満々たる自己顕示であり、北の意識の限界がそこに見える。この性癖、環境的な意識は生涯変るところがなかつた」と、まあ滅多打ちであります。さらに、「北の論述は社会主義ではなく、子供の作文である」とまで言いますが、こうなるとハイそうですか、と見過ごせません。こういう清張の見方は、丁度戦後の左翼思想家と称する人たちと共通する切り口だと思います。

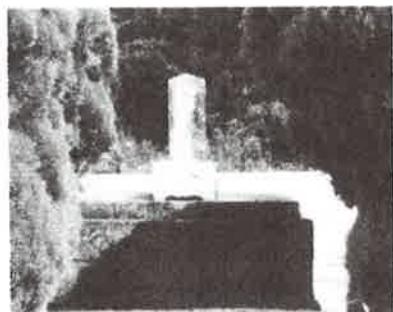
さらに、「近頃の本（松本健一「佐渡コミュニケーション論序説」）をとつてみれば、北一輝が佐渡で

若い頃平民新聞をたくさんとつて、それを薦められ、町民だか誰だか、それにかぶれたのがいたり、あるいは学校でストライキみたいなものがあつた。それだけの事実を、拡大して佐渡コミニーン運動などという思いつきを言う若者がいるが、その理解は実態とはほど遠い」と、一刀両断であります。まあ、議論のあるところでしよう。



北一輝

(『佐渡の歴史』郷土出版社)



北家の墓（両津）

戦後、私どもは北一輝といふと、日本ファシズムの巨頭といふくらいで何かよく分からぬで、誰も問題にしないで切り捨ててきました。しかし、佐渡の人間には北一輝の主張

というのが非常によく分かります。例えば、軍事力をどうするかについて、北一輝は、軍事力は持たなければいけない、軍事力は何のためにあるかと云うと、それは日本人が経済的にも政治的にも豊かになり、生活が豊かになるためにある、と述べます。

また、日本ファシズムと悪く言われる割には、北一輝は、政府も天皇も支配する人たちが、日本国民全体が幸福になるよう努めることが必要なんだ、と説いております。北一輝の言う社会主義は私どもがヨーロッパの書物を読み、習った社会主義とは違います。彼はちょっと分り難い「国民社会主義」という言葉を使いますが、国民のことを考えるということが社会主義の意味なのだと云つております。

明治の佐渡をもう一度思い出して頂きたいのですが、一国でも一県でもなくなり、新潟県に併合され意氣消沈している佐渡、明治十年代から二十年代にかけ、これまでやつて來ていた諸国の廻船も一切来ず、エンジンの時代になつていきます。佐渡鉱山だけが稼動しておりますが、その鉱山ではアメリカの新式の機械導入で沢山の人たちが失業に喘ぐようになつております。相川の人たちの働きかけで漸く機械を動かさず相川の人間を雇うことで折り合いがつきましたが、当時の佐渡にしてみれば、明治政府のこの機械導入は非常に

厳しいものであつたはずです。

明治十六年に、日本で第一号の不敬罪となつた相川大工町の質屋の有田真平が出てきます。有田は、こういうことに平然としている政府が、果たして我々の政府なのかという風に論陣を張り、国民対皇室のことと論じました。有田の言うところは北一輝に近いんです。しかし、自由民権運動が始まつてもう三年経過しているのですけれども、それが天皇をながしろにしている、つまり、不忠ということで不敬罪の適用を受け、病身なのに引きずり出され、新潟の刑務所で獄死してしまいます。葬儀委員長は、先に申しました民権運動の鵜飼郁次郎（後に国権論者になる）ですから、面白いといえば面白いわけですけれども。

ところがこういう風にして起きた自由民権運動は、明治二十年ころから有様が変わつてきます。伊藤博文が出てきて、我が国の鉱山の長老、おおしまとかとう大島高任を鉱山局長として招請し、相川鉱山の年間収入に匹敵する莫大な資金を投入しました。兌換貨幣の地金確保のため開発を急いだのです。そのため相川には親政府派が生まれ、民権運動は分裂時代に入ります。

冒頭申し上げましたように、北一輝の家は酒造りが駄目になる、親戚の伯父さん（星野和三次）がやっている海運会社が駄目になる、そういう深刻な事態のなかで明治政府のやつていることは果たして国民のためになるかというような頭を持つて暮しており、そこへ八

田がやつて来ていろんなことを教えてくれた。こんなことで、この北少年はすっかり社会進化論にはまつてしまつたわけです。後に二・二六事件の青年将校に影響を与えたということです。首が飛ぶわけですが、爾来、北一輝の研究というのはファシズムの元祖と言われるだけで、殆ど先ほど清張がなで斬りにした程度であります。

私どもは明治維新と第二次世界大戦敗北という二つの事件を経過したわけですが、日本人の精神伝統ということからみると、まだ二・二六事件の前で止まつてゐるようと思われます。田中惣五郎は、「日本人が今度考え出す時には支那事変のところからだらう」と。

ただそういうことになるか私には分りませんけれども、そういう意味では、北一輝がどういう土壤の中で日本人として独自の考えを持つことになつたかを知ることは、当分の間追求しなければならない課題だらうと思います。

このほかに先ほど申し上げた「迅雷隊」ですが、結成されたものの、具体的な行動を起こすに至つておりません。この奉行所の方針に抗し、たつた一人で反乱を起こし、新潟戦争に出陣していくた、地役人の山西敏彌（佐和田町沢根）と言う人物がおります。この人が出陣してゆく時に『幕末遭難記』を書いております。内容はここでは申しませんが、これはもう新潟戦争で負けに負けて逃げて、プロシャの武器商人スネルなどと一緒に博多まで逃

げて行き、あとで佐渡に帰つてくる男です。のちに山西は新潟の水道町に住み、岩木擴いわきひろむと
いう佐渡史の編纂者が出かけてその顛末を聞き取り、本にまとめております（「佐渡奉行所
地役人山西敏彌君明治維新脱走始末自記」、岩木文庫上巻所収）。

佐渡の明治維新というのは、ある意味では日本を揺るがすようなところがございました。
維新の時に佐渡の人間がどうしてそういうことを考えたのかを知ることは、私どもが生ま
れ育つた故郷のため是非とも必要なことだと思うわけです。

（了）

●人物等略記

・新井精斎（1773～1841）

群馬県（前橋）生まれ。徳川、中、末期の医家、文章家。元は志鍊萬輔といい、江戸に出て遠山景晋に仕え、諸国を往来し、至る所の紀行を著した。

1805年（文化2）蝦夷地巡回時は「東海參譚」、1809年（同6年）朝鮮人来応接のときは「有明日記」を書いた。1815年（文化12）佐渡に遊び、遂に小倉村に留まり、医を業とし子弟に読書を授けた。

・竹越与三郎（慶応元年～昭和25年）

埼玉県（本庄）生まれ。新聞記者、政治家、民間史論家。慶応義塾に学び、「時事新報」記者等を経て西園寺公望らに知られ、「世界之日本」誌主筆。昭和15年枢密顧問官。また、在野の歴史家として著書に「二千五百年史」「日本經濟史」などがある。

・丘浅次郎（明治元年～昭和19年）

静岡県生まれ。動物学者。東大卒業後、ドイツ留学、ワイスマンなどに師事。帰国後東京高師で長らく教鞭をとり、ヒル、ホヤなどの形態、分類を研究。特に進化論の普及に功績。著書に「進化論講話」「生物学講話」がある。

・田中惣五郎（明治27年～昭和36年）

新潟県生まれ。昭和期の歴史学者。昭和28年から明治大学教授。マルクス主義的立場から日本近代史研究をすすめ、とりわけ人物の評伝的研究に業績。著書に「幸徳秋水」「吉野作造」「北一輝」などがある。

・大島高任（文政9年～明治34年）

幕末・明治期の鉱業技術者で、近代製鉄技術の父と呼ばれる。20歳のとき、長崎に留学、蘭学を修め、同時に兵法、砲術、採鉱、冶金技術を学び、大砲鑄砲や鉱山開発を志す。嘉永6年（1853）水戸藩の要請により、反射炉で鉄砲に成功、これに要する大量の鉄鉱確保のため南部藩釜石鉱山の開発を行い、安政4年（1857）12月1日、日本で初めて洋式高炉を建設、出鉄を行い、近代製鉄技術の道を開いた。明治政府のもとで、欧米の鉱山、機械事情を視察、釜石、小坂、佐渡などの鉱山の近代化に業績

を残した。

・岩木 擴（安政元年～昭和8年）

佐渡（相川）に生れる。慶応2年（1866）円山渕北の塾、学古塾に入る。明治8年、鶉飼郁次郎とともに新潟師範入学、翌年卒業、10年東京府雇師範学校詰となる。20年から25年函館の私立東川小学校教諭、30年相川尋常小学校校長、その年に辞職。34年「佐渡名勝」「相川町誌」「畠野村誌」を手がけ。42年「佐渡国誌」編纂に携わる。